

1. 背景とねらい

北部地域における密植桑園の春蚕収穫枝は、前年の春切した越年枝条を利用しているが、この枝条は年によって条径が太くなり、機械収穫に支障を来す場合があるほか、収穫労力的にも過重となる。そこで、春蚕期に細い枝を利用するため、夏切後の再発枝条を連年夏切する収穫法について、検討したので参考に供する。

2. 成果の内容

1) 密植桑園の連年夏切収穫法

春蚕期に地際から基部伐採取穫（夏切）を行い、再発した枝条を晩秋蚕期に地上80cm残し水平伐採取穫を実施し、翌年の春蚕期に再び収穫する。

2) 連年夏切の収穫法を、従来の一春・一夏輪収法と比較しても、同程度の収穫量が得られる。

3) 夏切再発枝条は春切の枝条より約30%条径が細く、収穫枝条の細径化が図られる。

4) 7月中旬以降夏切した再発枝条は枝条の伸びが劣るほか、翌春の収穫量も減少するため、夏切は7月上旬までに実施する。

5) 適応品種

夏切再発枝条は寒枯れ・先枯れ・胴枯病等の発生が予想されることから、地域適応品種のなかでも耐寒・耐胴枯病性の勝る品種「しんけんもち・ゆきしのぎ」等を用いる。

3. 指導上の留意事項

1) 夏切再発枝条の枝枯防止策

晩秋蚕期における夏切再発枝条の収穫は、翌春の枝枯性病障害の発生に大きな係わりを持つため1枝条に緑葉を5枚以上残すことが必要で、下部落葉状況等によっては80cm以上の高い位置から収穫するなどの対応が必要となる。

2) 晩秋蚕期の先端伐採は収穫量が少ないので、晩秋蚕期の3～4齡用桑として早めに利用する。

3) 冷夏年の対応

夏切再発枝条の生育が極端に劣る冷夏年においては未成熟な枝条が多いため、翌春の枝枯性病障害の発生が多いことから、翌春は春切として、樹勢回復を図る。

4) 圃場管理

基準施肥や適期除草管理及び土壤改良資材の施用等、既往の管理技術の遵守によって、桑の樹勢維持を図る。

4. 試験成績概要

表1 夏切主体の収穫法と蚕期別収葉量 (1995年 kg/10a)

試験区	春 蚕	第二春蚕	夏蚕	初秋蚕	晩秋蚕	晩々秋蚕	計	平均	指数
連年 夏切	1.923 (基部)				363 (80cm残)		2.286		2.286 106
輪収	夏切 (基部)				612 (50cm残)		1.888	1.814	84
	株上 夏切	1.415 (基部)				325 (60cm残)	1.740		
輪収	夏切 (基部)				768 (30cm残)		3.135	2.159	100
	春切			501 (80cm残)	682 (80cm残)		1.183		
収穫月日	6/22	7/12	7/31	8/18	9/7	9/27			

注) 桑品種：ゆきしのぎ

表2 夏切主体の収穫法と収穫部位の条径 (1995年 単位：mm)

試験区	春 蚕		第2春蚕		初 秋 蚕		晩 秋 蚕		晩々秋蚕	
	範囲	平均	範囲	平均	範囲	平均	範囲	平均	範囲	平均
連年 夏 切	4~18	9.5					3~ 8	5.4		
輪 収	夏 切	4~13	9.3					3~ 9	6.5	
	株上夏切			4~15	10.2					3~ 9 5.5
輪 収	夏 切	5~24	13.6					3~ 9	6.5	
	春 切					6~10	8.8	6~13	9.1	

注) 桑品種：ゆきしのぎ

表3 連年夏切収穫における年別収葉量 (kg/10a)

品 種 名	1991年	1992年	1993年	1994年	1995年
剣 持	1.763	1.448	1.195	857	1.790
ゆきしのぎ	2.135	1.568	1.332	1.376	1.903
しんけんもち	2.607	2.205	1.871	2.087	2.658
あおばねずみ	2.031	1.791	952	650	1.276

注) 春蚕期基部伐採、晩秋蚕期80cm残し中間伐採取穫